

# ECONOMY TOPICS

## 経済トピックス

2018.6.14

No.451



### 2018 年夏のボーナス調査

株式会社青森銀行と一般財団法人青森地域社会研究所では県内の給与所得者を対象に、毎年夏・冬の年2回、「ボーナスと最近の暮らし向き調査」を実施しております。本調査は県内のボーナスの需給状況や使いみち、また、現在の暮らし向きなどを探ることを目的としており、ここではその結果についてお伝えします。

#### 調査の概要

ボーナスの伸びについて期待指数の推移をみると、県内経済の緩やかな回復を背景に、高めの水準で推移しており、バブル崩壊後やリーマンショック後に比べ、ボーナスの伸びへの悪化懸念は薄らいでいる。また、近年、青森県においても人口減少による人手不足の進行などを背景に、賃上げが進んでいる。今回調査からは、受給者がボーナスの伸びについて期待感を抱いている状況がうかがわれる。

2018年夏のボーナス受給見込額は、平均で昨年夏の受給実績を5千円上回る34万6千円となり、若年層や独身者を中心に伸びがみられた。前年実績を上回るのは7年連続となる。

最近の暮らし向き調査では、2017年冬に比べ「良くなった」とする割合が1.6ポイント減少、「悪くなった」とする割合は3.7ポイント増加した。この結果、暮らし向き指数は46.1となり2.7ポイント低下したものの、高めの水準で推移しており、緩やかな改善の動きは続いている。

# 1. 2018年夏のボーナス調査

## (1) ボーナスの伸びへの期待について

- ・県内経済の緩やかな回復、賃上げ動向などから、ボーナスにも期待感
- ・期待指数 50.1、「良くなる」が「悪くなる」を上回り、改善傾向が続く

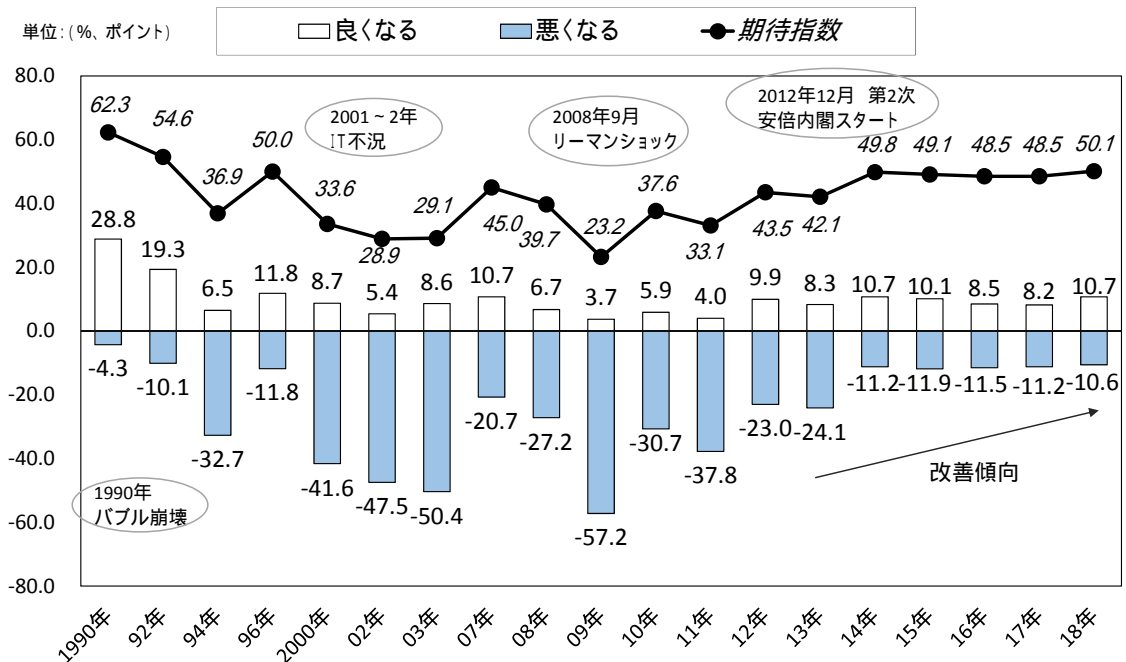
ボーナスの伸びについて期待指数の推移をみると、バブル景気により1990年は60.0を超えていたが、バブル崩壊後は大きく低下し、2002年にはIT不況の影響などから28.9、リーマンショック後の2009年には23.2へと落ち込んだ。しかし、アベノミクスの影響、県内経済の緩やかな回復への動きなどから2014年以降、「悪くなる」割合が10%程度に減少、期待指数は50.0近くの水準を維持している。小幅ながら改善傾向が続いており、

今回調査では「良くなる」が「悪くなる」を上回り50.0を超えた。夏のボーナスで50.0以上となるのは1996年以来22年ぶりである。

近年、青森県においても人口減少による人手不足の進行などを背景に、賃上げが進んでいる。今回調査からは、受給者がボーナスの伸びについても期待感を抱いている状況がうかがわれる。

(以上、1図参照)

(1図)夏のボーナスの伸び 期待指数の推移

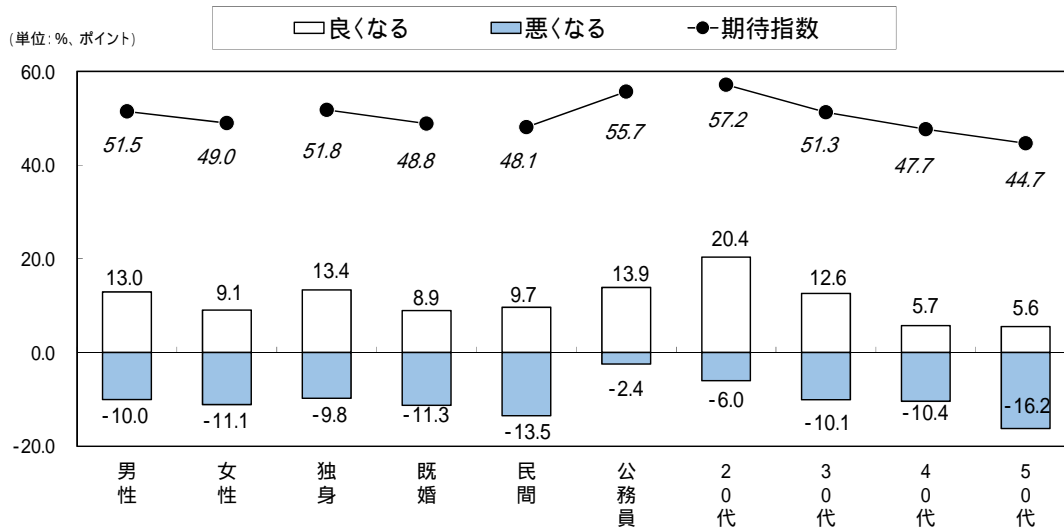


\* 期待指数 = 「良くなる」×1.0 + 「変わらない」×0.5 + 「悪くなる」×0.0

夏のボーナスの伸びを属性別にみると、男性、独身、公務員、20代、30代の伸びが全体の期待指数を押し上げた。

(以上、2図参照)

(2図)夏のボーナスの伸び



## (2) ボーナス支給見込額

- ・平均 34 万 6 千円、昨年夏の支給額を 5 千円上回る
- ・ボーナスの支給見込額は改善傾向、7 年連続で昨年支給額を上回る

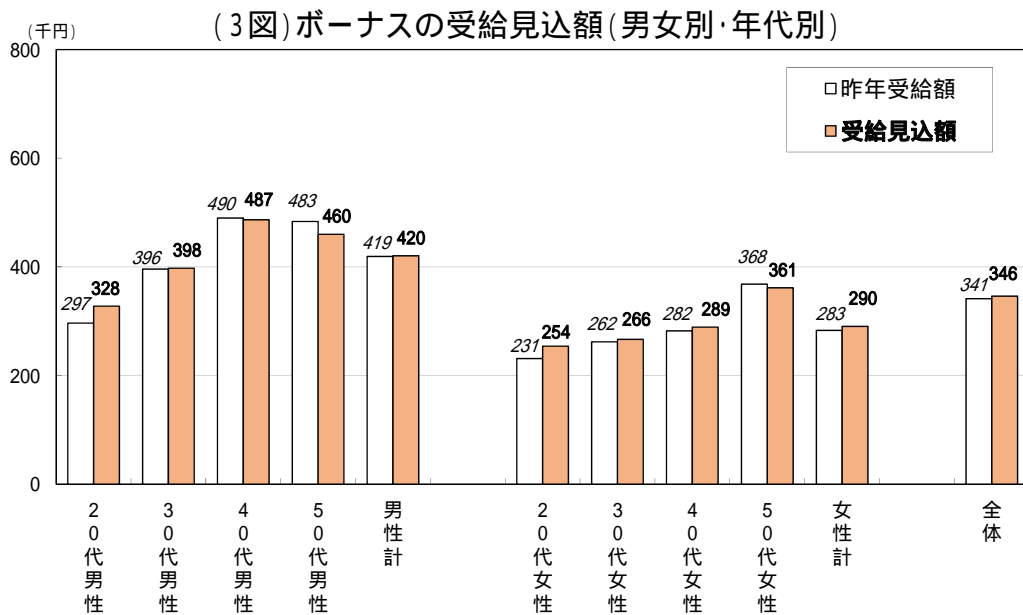
今夏のボーナス支給見込額は平均で 34 万 6 千円となり、回答者の昨年夏の支給額(平均 34 万 1 千円)を 5 千円上回った。男女別・年代別にみると、最も見込額が多かったのは 40 代男性の 48 万 7 千円で、次いで 50 代男性、30 代男性、50 代女性などの順となった。

男女別で比較すると、男性が女性を 13

万円上回った。

年代別に支給見込額と昨年支給額との開きをみると、20 代男女、30 代男女、40 代女性は支給見込額が昨年支給額を上回った。一方、40 代男性と 50 代男女は下回る見込みとなっている。

(以上、3図参照)



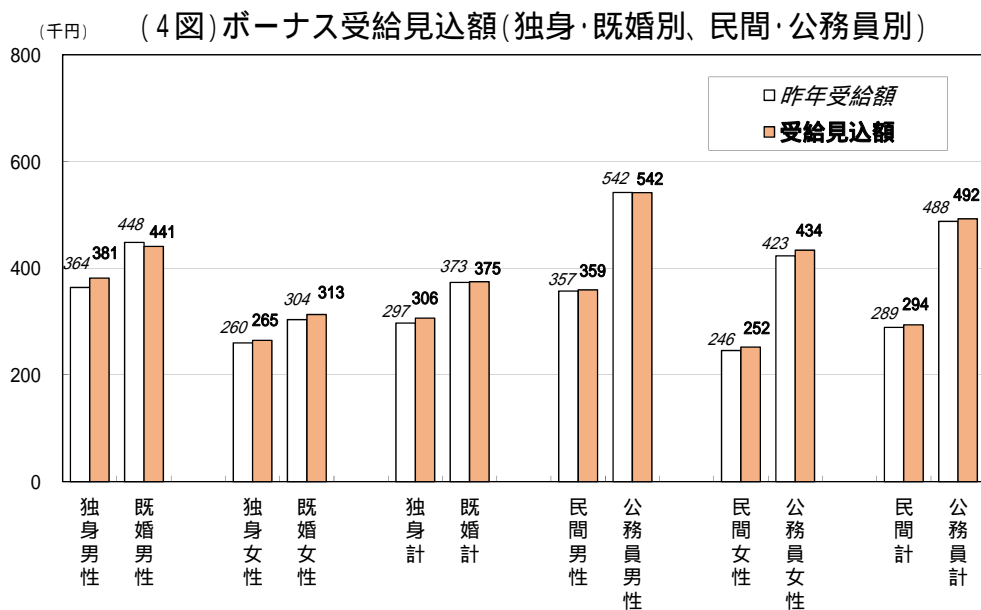
本文、グラフの「20代」は20歳未満、「50代」は60歳以上を含む、以下同様

次に、受給見込額を独身・既婚別にみると、昨年夏の受給実績と比べ、独身者が9千円、既婚者は2千円それぞれ上回る見込みである。しかしながら、既婚男性は7千円下回る見込であり、中高年齢層男性においては受給見込額に厳しさが

みられる。

民間・公務員別でみると、民間が5千円、公務員が4千円それぞれ上回る見込みである。

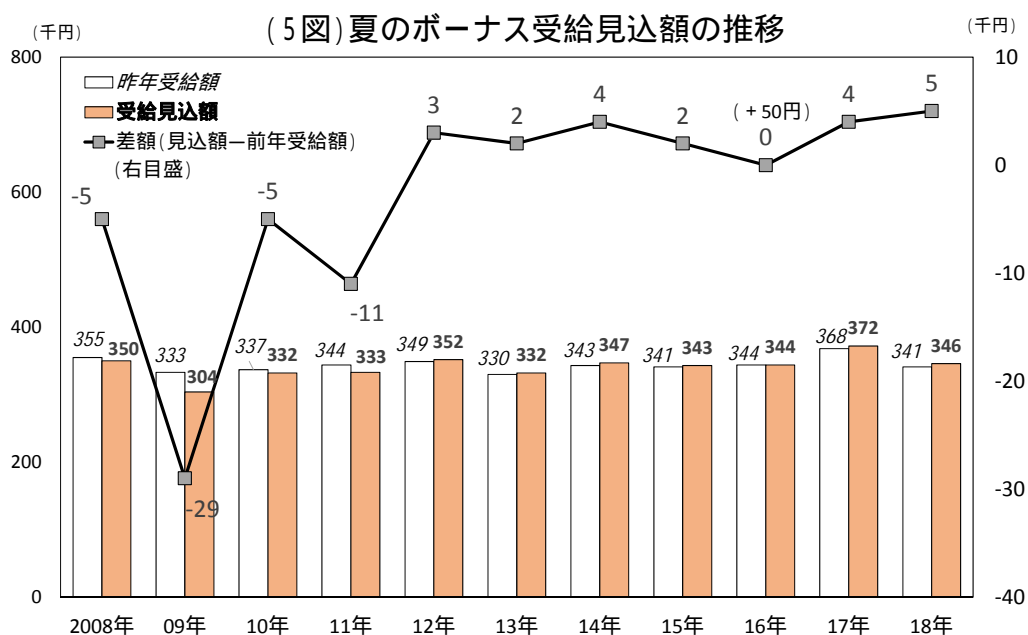
(以上、4図参照)



夏のボーナス受給額について 2008 年以降の推移をみると、2009 年はリーマンショックの影響で受給見込額が大幅に落ち込んだ。しかしながら、2012 年以降は緩やかな景気回復が進み、受給見込額と昨

年受給額との差額はプラスに転じている。7 年連続で昨年受給額を上回っており、ボーナスの受給状況は改善傾向が続いている。

(以上、5 図参照)



### (3) ボーナスの希望額

・ボーナス希望額は平均 46 万 3 千円

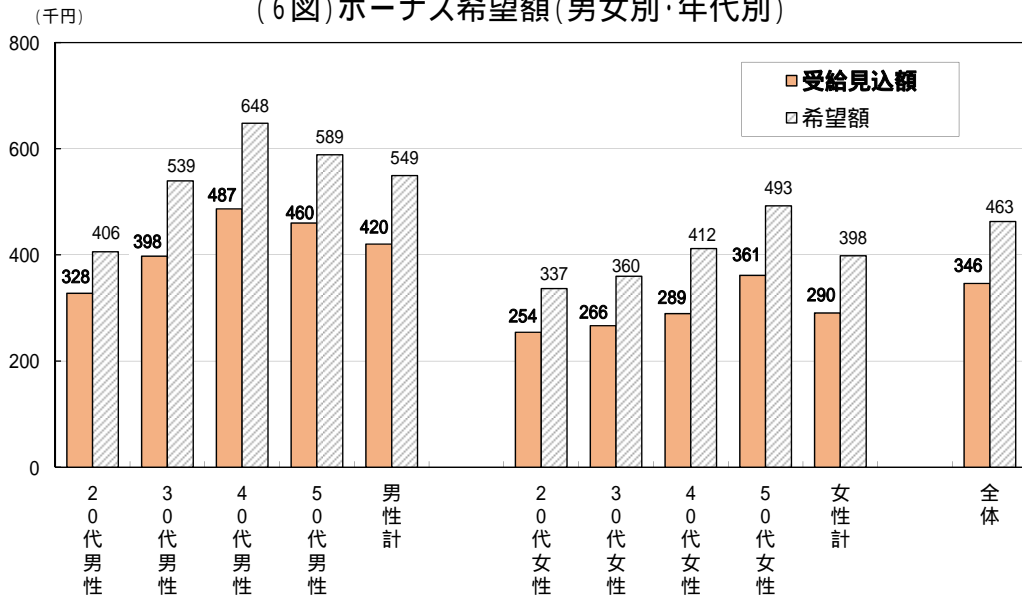
今夏のボーナス希望額を男女別・年代別にみると、男性が 54 万 9 千円、女性は 39 万 8 千円となった。最も高かったのは 40 代男性であり、次いで 50 代男性、30 代男性、50 代女性などの順となった。

全体では 46 万 3 千円となり、受給見込額 34 万 6 千円と 11 万 7 千円の開きのみ

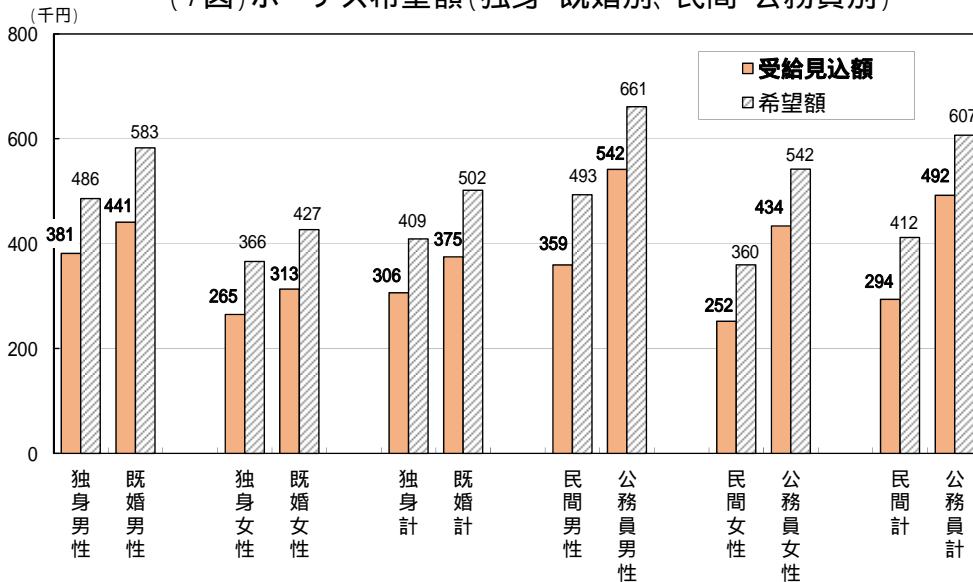
られた。男女別にみると、男性が 12 万 9 千円、女性は 10 万 8 千円となった。属性別にみると、一家の家計を担う立場である既婚男性が 14 万 2 千円と開きが最も大きく、ボーナスの上乗せ希望が強い状況がうかがわれた。

(以上、6 図、7 図参照)

(6図) ボーナス希望額(男女別・年代別)



(7図) ボーナス希望額(独身・既婚別、民間・公務員別)



#### (4) ボーナスの使途計画

・「消費」、「返済」割合が減少、「貯蓄」割合は増加

この夏のボーナスの使途計画は、「消費」割合が39.1%、「貯蓄」割合が47.9%、「返済」割合が13.0%となった。昨年夏に比べると、「貯蓄」割合が増加し、「消費」、「返済」が減少した。今回調査では消費、返済の減少が貯蓄へシフトしたものとみられ

る。

属性別にみると、男女別では男性が「消費」、「返済」割合、女性は「貯蓄」割合が高かった。独身・既婚別では独身者が「消費」、「貯蓄」割合、既婚者は「返済」割合が高かった。民間・公務員別では民

間が「消費」割合、公務員は「返済」割合が高かった。

年代別にみると、「消費」割合は50代が最も高く、最も低い30代と6.3ポイントの開きがみられた。「貯蓄」割合は30代、(1表)ボーナスの使途計画

「返済」割合は40代が最も高い割合となった。「返済」の内訳をみると、自動車ローンは20代、住宅ローンは40代、50代の割合が高かった。

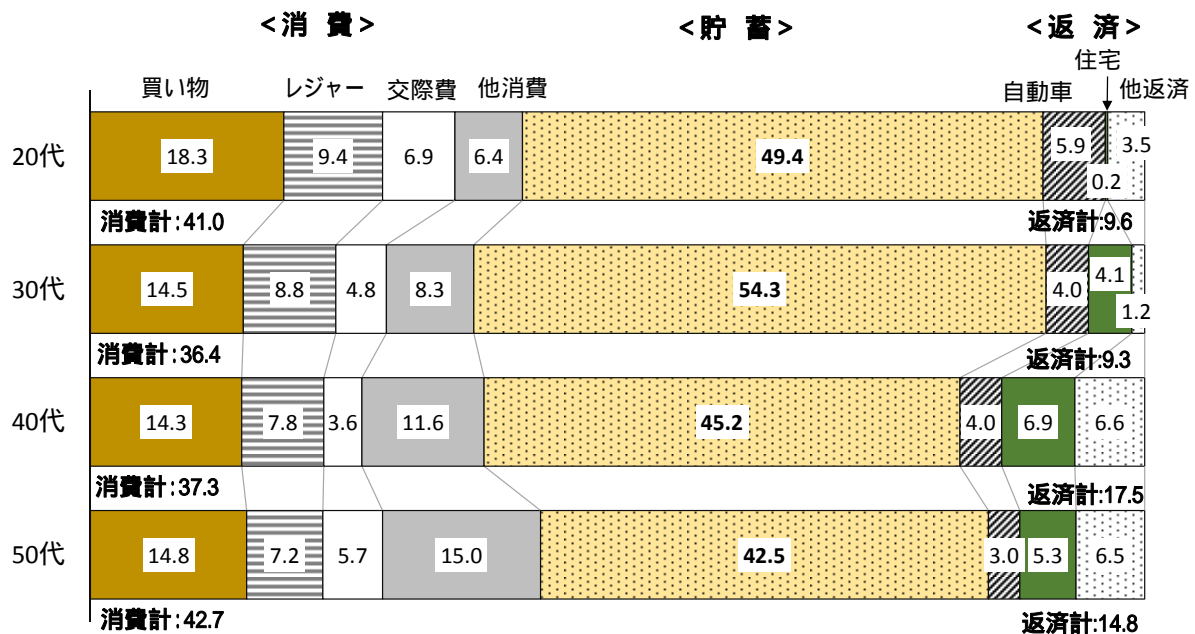
(以上、1表、8図参照)

(単位:%)

	消費割合				貯蓄割合	返済割合				
	買い物	レジャー	交際費	その他		自動車	住宅	その他		
男性	39.6	15.5	8.1	4.9	11.1	44.3	16.1	4.6	7.1	4.4
女性	38.8	15.4	8.4	5.3	9.7	50.6	10.6	3.9	2.2	4.5
独身者	42.0	17.4	8.5	6.3	9.8	48.9	9.1	4.6	0.9	3.6
既婚者	37.0	13.9	8.1	4.2	10.8	47.1	15.9	4.0	6.8	5.1
民間	39.9	15.8	8.3	5.2	10.6	47.8	12.3	4.2	3.5	4.6
公務員	37.0	14.5	8.2	4.8	9.5	47.9	15.1	4.4	6.6	4.1
2018年夏計	39.1	15.4	8.3	5.1	10.3	47.9	13.0	4.2	4.3	4.5
2017年夏計	40.1	17.7	8.4	5.6	8.4	45.4	14.5	4.1	6.1	4.3
2016年夏計	40.4	16.7	8.7	5.9	9.1	43.9	15.7	5.1	5.8	4.8

(8図)年代別ボーナスの使途計画

(単位:%)



## (5) 貯蓄の目的

・「安心だから」が増加、目的を持った貯蓄はやや減少傾向

貯蓄の目的(複数回答)は、「安心だから」の割合が最も高く、以下「老後の備え」、「教育」などと続いた。今回調査では生活防衛的な貯蓄として「安心だから」が昨年夏に比べ 7.2 ポイント増加した。一方、「老後の備え」、「教育」、「病気の備え」は幾分減少し、目的を持った貯蓄にやや減少傾向がみられた。

男女別にみると、男性は「住宅」、「耐

久消費財」の割合が女性に比べ高かった。一方、女性は「旅行」、「病気の備え」が男性を上回った。

独身・既婚別では、独身者は「安心だから」の割合が5割を超え、「旅行」が3位となった。一方、既婚者は「教育」がトップとなり4割を超えたほか、「老後の備え」、「住宅」の割合が高かった。

(以上、2表参照)

(2表) 貯蓄の目的 (複数回答)

(単位: %)

	男性	女性	独身	既婚	2018年夏計	2017年夏計	2016年夏計
住宅	16.7	9.5	4.4	18.7	12.5	13.5	14.2
教育	(3) 26.1	27.8	3.5	(1) 44.9	(3) 27.0	(3) 29.2	(3) 28.1
結婚	8.5	7.9	17.7	0.9	8.2	8.1	8.7
旅行	16.1	(3) 28.2	(3) 26.0	20.9	23.1	22.6	20.8
耐久性消費財	11.8	8.1	8.8	10.3	9.7	10.8	10.9
病気の備え	8.8	12.3	12.1	9.9	10.8	13.1	12.5
老後の備え	(2) 30.9	(2) 37.2	(2) 31.0	(2) 37.3	(2) 34.6	(2) 36.0	(2) 35.9
安心だから	(1) 45.5	(1) 41.9	(1) 52.8	(3) 36.2	(1) 43.4	(1) 36.2	(1) 40.3

## 2. 最近の暮らし向き調査

・暮らし向き指数4期ぶりに低下したものの、緩やかな改善の動きは続く

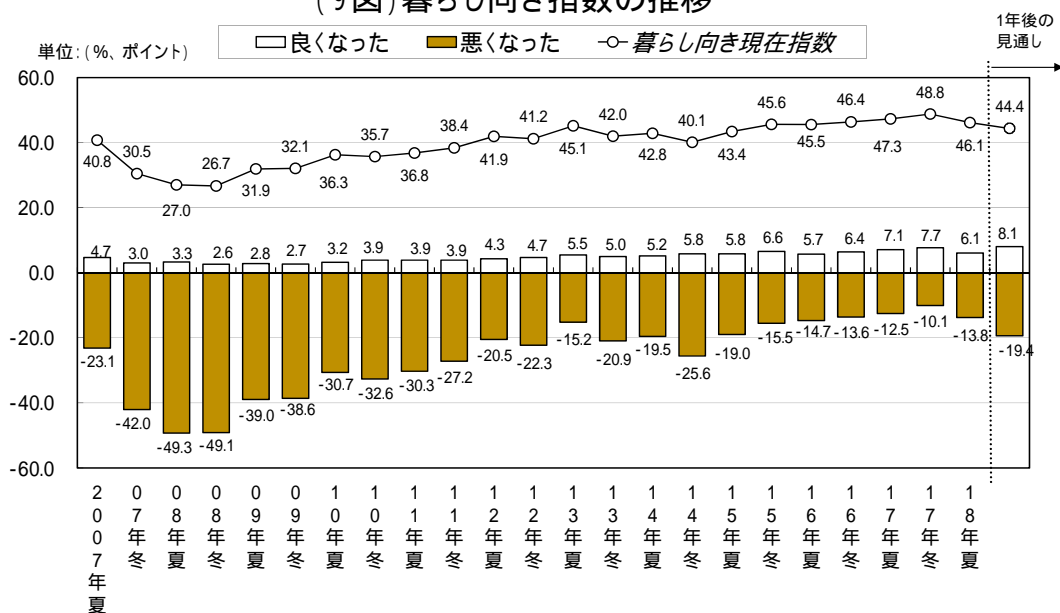
まず、「昨年の中頃に比べ、最近の暮らし向きはいかがですか」と尋ねたところ、「良くなった」とする回答が6.1%(2017年冬比1.6ポイント減少)、「悪くなった」は13.8%(同3.7ポイント増加)、「変わらない」が80.1%(同2.1ポイント減少)となった。この結果、「現在の暮らし向き指数」(3表、注記参照)は46.1となり、2017年冬に比べ2.7ポイント低下した。

「暮らし向き指数」は2008年のリーマンショック以降、緩やかな改善の動きがみられ、「悪くなった」も7期連続で20%を下回り、悪化傾向は低水準で推移している。今回調査の暮らし向き指数は4期(半期毎)ぶりに低下したものの、依然として高めの水準にあり、緩やかな改善の動きは続いている。

(以上、9図参照)



(9図) 暮らし向き指数の推移



注) 現在指数 = 「良くなった」×1.0 + 「変わらない」×0.5 + 「悪くなった」×0.0  
 今後指数 = 「良くなる」×1.0 + 「変わらない」×0.5 + 「悪くなる」×0.0  
 数値は四捨五入の関係から構成比の合計が100.0にならない場合がある。

(3表) 現在の暮らし向きについての見方(属性)

	現在 → 今後		現在 → 今後		現在 → 今後		現在 → 今後	
	良くなった	良くなる	変わらない	変わらない	悪くなった	悪くなる	指数	指数
男性	6.3	7.6	79.3	75.3	14.4	17.1	46.0	45.2
女性	5.9	8.4	80.8	70.6	13.3	21.0	46.3	43.7
独身	7.1	9.1	81.4	76.1	11.6	14.9	47.7	47.1
既婚	5.3	7.3	79.3	70.1	15.3	22.5	45.0	42.4
民間	6.2	9.1	78.0	70.0	15.8	20.8	45.2	44.2
公務員	5.7	4.9	86.5	80.0	7.8	15.1	49.0	44.9
20代	11.4	12.7	81.4	81.4	7.3	5.9	52.0	53.4
30代	8.3	10.8	78.9	75.1	12.8	14.1	47.7	48.3
40代	3.6	5.8	81.7	72.1	14.7	22.1	44.4	41.8
50代	1.4	3.2	78.4	61.5	20.2	35.3	40.6	33.9
全体	6.1	8.1	80.2	72.6	13.8	19.4	46.1	44.4

次に「1年後の暮らし向きはどうかと考えますか」との問いに対しては、「今後良くなる」が8.1%、「今後悪くなる」が19.4%、「変わらない」が72.6%となった。この結果、暮らし向きの「今後指数」は「現在指数」を1.7ポイント下回る44.4と、幾分低下する見通しである。

年代別にみると、20代、30代は「今後指数」が上昇しており、若年層においては暮らし向き改善への期待感がみられる。一方、40代、50代は「今後指数」が低下し、暮らし向きの厳しさが増す見通しである。

(以上、3表参照)

以上

**【調査要領】**

調査対象者 県内在住の男女給与所得者  
調査時期 2018年5月中旬～5月下旬  
配布・回収枚数 配布枚数 1,000枚  
回収枚数 961枚 (回収率 96.1%)

**回答者内訳**

(単位:人)

属性	男性	女性	合計
20代	95	126	221
30代	105	137	242
40代	114	165	279
50代	98	121	219
独身	144	254	398
既婚	268	295	563
民間企業	279	437	716
公務員	133	112	245
合計	412	549	961

注:20代は20歳未満、50代は60歳以上を含む

本件に関する照会先

一般財団法人 青森地域社会研究所  
担当:主任研究員 野里和廣  
TEL.017-777-1511